「男、突っ走る！」

第37回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（19）　名古屋芸術専門学校1年生

眞榮田　浩平（19）　名古屋芸術専門学校1年生
福沢　瑞枝（19）　名古屋芸術専門学校1年生
長井　夏美（19）　名古屋芸術専門学校1年生
加藤　直也（19）　名古屋芸術専門学校1年生
大久保　正樹（23）　名古屋芸術専門学校1年生
植野　雪奈（19）　名古屋芸術専門学校1年生
船倉　篤志（19）　名古屋芸術専門学校1年生
奥村　裕司（20）　名古屋芸術専門学校1年生
野添　美南（20）　名古屋芸術専門学校1年生
山口　拓海（19）　名古屋芸術専門学校1年生
安永　和也（19）　名古屋芸術専門学校1年生

渡部　康太（39）　名古屋芸術専門学校教務課長
鈴島　孝雄（52）　名古屋芸術専門学校入学事務局長
吉野　茉由（25）　名古屋芸術専門学校入学事務局員
鈴本　貴広（44）　名古屋芸術専門学校講師
藤堂　香（54）　名古屋芸術専門学校講師
堀江　朝日（35）　名古屋芸術専門学校講師
堀内　泰正（58）　名古屋芸術専門学校講師
山浦　重幸（58）　名古屋芸術専門学校講師

1　名古屋芸術専門学校・全景

N「早いもので、一年生の後期の授業が始まりました。後期になると、授業の内容も応用的になり、それと同時進行で、僕らは年度末に行われる進級制作展に出品する作品作りに追われていたのでした」

2　同・5階・502教室

美南や他の学生たちが、パソコンで原稿を打っている――と、ドアが開き、藤堂が入ってくる。

藤堂「ナミ、うっちー見てない？」

美南「今日はもう帰りましたよ」

藤堂「そっか」

美南「何かありました？」

藤堂「栄新名所図絵っていう雑誌あるでしょ」

美南「ああ、堀内先生の授業で作る歴史雑誌の企画ですよね」

藤堂「そうそう。あれの編集部メンバーにうっちーを入れたんだけど、来週やる雑誌プ

レゼンの資料作りお願いしようと思って」
美南「ＬＩＮＥ入れときましょうか？」
藤堂「ありがとう、お疲れね」
と、ドアを閉めて出ていく。
美南「お疲れ様です」

3　同・４階・廊下
浩平と雪奈が一緒に、おにぎりを食べている。
雪奈「海外研修は、アメリカ行くんだっけ？」
浩平「おお。雪奈ちゃんは、どこ行くの？」
雪奈「私はイタリア」
浩平「アメリカとはまた違って、アートな世界が見れるんだろうな」
雪奈「お土産よろしく」
浩平「分かってるよ、そっちこそ頼むぞ」
雪奈「はいはい」
と、４０１から夏美が出てくると、
夏美「お熱いところ邪魔するけど、眞榮田、ちょっと良い。ＣＧのライティングで見て

ほしいところがあって」
浩平「分かった、行くわ。（と雪奈に）じゃあな」
雪奈「うん、バイバイ」
と、４０１に入っていく浩平と夏美――入れ違いで、エレベーターが開き、篤志と裕司が出てくる。
裕司「ゆきちゃん、お疲れ」
篤志「植野さんが四階にいるってことは、そういうことだね」
雪奈「すぐ三階の雑貨ルームに戻るよ」
裕司「良いんだよ別に。眞榮田に会いたきゃ、ゆっくり四階にいれば」
雪奈「おっくー……（とふくれる）」
裕司「冗談だって」
笑い合う一同――と、４０３から鈴本が出てくる。
一同「お疲れ様です！」
鈴本「お疲れ。みんな課題作りは進んでるか？」

雪奈「少しずつ進めてます」
鈴本「進級制作展までに、みんな名刺を作っとくと良いぞ。自分の作品を売り込むために、自分がどこの誰なのかを伝えるためにもな」
裕司「名刺ですか？」
鈴本「最低限、自分の名前と連絡先は必要だ。あとは自分の入れたいものを入れたら良いんだ。イラストレーターやデザイナーとか、肩書も自分で作れば良い。学校名や専攻名だけ入れてたら、それは学校内だけでしか使えないからな。何のために、誰のために、名刺を作るのか、その目的だけはちゃんと考えた方が良いぞ。それと、テーマとコンセプトはブレないように」
一同「はい」
　と、エレベーターのドアが開き、乗り込む。
鈴本「じゃ、お疲れさん」
　と、エレベーターのドアが閉まる。

一同「お疲れ様です」
雪奈「名刺かぁ」
裕司「俺も作ろうかな」
篤志「あったほうが、今度便利だもんな」
一同、真剣な顔で頷く。

4

同・表（一週間後）
渡部と吉野が朝の挨拶をしながら学生を迎えている――次々に登校してくる学生。その中に直也と正樹もいる。
直也「おはようございます」
正樹「おはようございます」
渡部「昨日も校舎閉まる二十一時ギリギリまでいたのに、今朝も頑張るね」
正樹「企業プロジェクトがありますからね」
吉野「ＣＭ制作は、毎年恒例の映像専攻に依頼が来る大きなプロジェクトだもんね、頑張ってね」
直也「頑張ります」
正樹「ありがとうございます！」

と、校舎の中へ入っていく。

5　同・４階・４０１教室

直也と正樹が入ってくる――既に来ている瑞枝が作業をしている。

直也「福本、早いな」

瑞枝「朝一からやらないと、間に合わないと思ってさ」

正樹「さすがだね」

瑞枝「この時期はみんな忙しいから、しょうがないといえばしょうがないけどさ」

直也「頑張るしかないか」

と、浩平と夏美が入ってくる。

浩平「おはよう」

夏美「おはよう。みんな早いね」

瑞枝「少しでも進めないとね」

夏美「（パソコンの準備をしながら）けどさ、こんな生活が残り二年以上もあると思うと、ゾッとするよね」

直也「映像はそんなもんだろ」

浩平「これからもっと忙しくなるんだ。これぐらいで悲鳴上げてたら、後が持たないぞ」
夏美「まあ、それはそうかもしれないけどね」
瑞枝「さ、今日も一日、授業も課題も頑張ろう」

6　同・5階・502教室

堀江がパソコンで資料を作っている―
―近くの席で作業をしている美南。
と、ドアが開き、山浦が入ってくる。
山浦「おはようございます」
堀江「あれ、山浦先生どうされたんですか？」
山浦「一応、雑誌プレゼンに出席しようと思って。僕は、担当雑誌は特にないですが、添削をお願いされることがあるかもしれないから、プレゼンに出席してくれないかって堀内に頼まれましてね」
美南「（苦笑して）いくら大学の同級生だからって、堀内先生、山浦先生への扱い雑じゃありませんか」

山浦「堀内は、昔からそういう奴なんですよ」
堀江「あ、野倉さん」
美南「はい」
堀江「ちょっとお願いがあるんだけど、教務からコピー用紙の束もらってきてくれる？多分、雑誌プレゼンの資料で結構コピー用紙使うから」
美南「分かりました」
と、出ていく。

7　同・同・廊下

美南がエレベーターのボタンを押す――ドアが開き、ぎこちなく鞄を持っている雅也が出てくる。
雅也「ああ、ナミ。おはよう」
美南「おはよう。良かった、さすがに今日は来るよね」
雅也「当たり前でしょ。今日は雑誌プレゼンなんだから」
美南「いつもは学校が閉まるまで残ってるは

ずなのに、最近よく早く帰っちゃってたから、何かあったのかと思って」

と、雅也がベンチに鞄を置くと、

雅也「痛ってぇ……」

美南「何かあったの？」

雅也「実はさ、この間から帯状疱疹にかかっちゃってさ」

美南「帯状疱疹って、あの水疱瘡みたいなやつでしょ。体中に水膨れができる」

雅也「そうそう。今まさに、お腹周り全体にブワァーってそれができちゃってるの」

美南「痛いんでしょ、それ」

雅也「うん。しかも、囲むようにできてるからさ、寝返りも打てないし、何かに当たると激痛が走るから、電車乗ってる間も気が気じゃないよ」

美南「よく来たね、そんな状態で」

雅也「雑誌プレゼン、欠席するわけにはいかないでしょ。資料も、この一週間で何とか用意したけど、これで良いのかなと思っち

やってさ」
美南「そんな状態で、今日大丈夫？」
雅也「資料はもうできてる。あとは、みんなの前で喋れば何とかなるんだから」
美南「無理しないでよ」
雅也「俺が帯状疱疹になったなんて、誰にも言わないでよ。ナミだから言うんだから」
美南「うん……。あ、私、コピー用紙取りに行かなきゃいけないんだった」
と、慌てて階段を下りていく。
雅也「余計な心配させちゃったかな……」
と、エレベーターが開き、堀内が出てくる。
雅也「（痛みを我慢して）おはようございます」
堀内「おはよう。木内、雑誌プレゼンの資料はできてるか？」
雅也「はい。後は印刷するだけです」
堀内「分かった、ありがとう」
と、５０２教室に入っていく――大き

な溜息をつく雅也。

8　同・同・５０２教室

学生たちが順番にプレゼンをしていく

――それぞれ席に座っている学生たち

と、渡部、藤堂、堀内、山浦、堀江。

N「思いがけず帯状疱疹になってしまった自分ですが、体に走る激痛と闘いながら、何とか雑誌プレゼンを終えることができたのでした。何故、自分が帯状疱疹になどなってしまったのか、その理由は自分でも分かりませんでした」

9　木内家・雅也の部屋（夜）

キャリーケースに荷物をまとめている雅也。

N「そして、雑誌プレゼンから一ヶ月が過ぎ、ようやく帯状疱疹も引いてきた自分は、一週間のアメリカ研修に向けての身支度を整えていました」

机の上に置いてあるパスポートを、ポーチに入れる雅也。

雅也「（つぶやくように）パスポートは、これでオッケーで、あとは……」

と、雅也のスマホに通知が来る――雪奈からである。

雅也「（ＬＩＮＥを見て）ゆきちゃん？」

雪奈の声「うっちー。突然でごめんね。私、今ちょっと浩平君とのことで悩み中。あいつと別れようか考えてるところ」

雅也「え……？」

と、ＬＩＮＥの返信をする雅也。

雅也の声「眞榮田と何かあったの？　多分、向こうも今忙しいから、それで雪奈ちゃんとの時間が作れないだけかもしれないよ」

と、ＬＩＮＥの通知が来る――浩平からである。

雅也「え、このタイミングで眞榮田から？」

と、ＬＩＮＥのトーク画面を開く。

浩平の声「うっちー。俺、雪奈ちゃんとこれ

からどうしたら良いか分からない。向こうは二人の時間作りたいみたいだけど、今の俺には到底無理。どうしたら良いかな」

雅也「嘘でしょ……」

と、ＬＩＮＥの返信をする雅也。

雅也の声「お互いに忙しいのは分かってると思うよ。忙しいからこそ、息抜きのために二人の時間を作りたいんじゃないかな」

と、険しい顔のままＬＩＮＥのトークを見ている雅也。

雅也「何で二人揃って、俺に相談してくるんだよ……」

と、ＬＩＮＥの通知が来る。

Ｎ「最初は二人で僕の事を煽っているのかなと思ったのですが、ＬＩＮＥの文面からして、お互い本当に僕に相談をしてきたようです。結局この日、僕は相手を間違えないように随時確認をしながら、二人からの相談ＬＩＮＥを返信していました」

10　アメリカ・空港・滑走路

飛行機が降り立つ。

N「十一月の初め、ついにアメリカ研修が始まりました。僕は初の海外に、とにかくワクワクしていました」

11　同・同・ターミナル

ソファーに座っている一同。デジカメを持って、周りを歩く雅也――夏美、瑞枝が座っているところに行くと、

雅也「なっちゃんとみずちゃんが、ハリウッドスターとそのマネージャーにしか見えないんだけど」

瑞枝「ついていきますよ、とことん」

夏美「マネージャーなんて、そんな贅沢な使い方できないよ」

雅也「（カメラを向けて）はい、撮るよ。はいチーズ」

と、カメラにピースをする夏美と瑞枝。

浩平、裕司、拓海がやってくると、

裕司「うっちー、撮るよ」

浩平「ほら、こっちこっち」

雅也「分かった」

拓海「うっちー、真ん中ね」

雅也「え、良いの」

裕司「はい、撮るよ」

と、自撮り棒を使って、スマホで撮影する。

裕司「はい、チーズ！」

と、それぞれポーズを撮って、カメラに映る。

12

同・ホテル・表

集合住宅のように、いくつもの同じような造りをした建物。

13

同・同・雅也と拓海の部屋

雅也と拓海が、それぞれ荷物を整理している。

拓海「眞榮田たちの部屋に合流しちゃう？」

雅也「各部屋四人部屋だけど、大丈夫かな？」
拓海「別に修学旅行みたいに先生が見回りにくるわけじゃないし、眞榮田の部屋は、確かあつぽんとおっくーも一緒だろ。みずちゃんはなっちゃんも合流して、みんなで集まったほうが楽しいと思うけど」
雅也「そうだよね。せっかくアメリカに来たんだもんね」
拓海「そのまま行っちゃうか？」
雅也「行っちゃおうか」

14　同・同・夏美と瑞枝と美南の部屋

夏美、瑞枝、美南が、それぞれ荷物整理をしている。

夏美「うるさい二人でごめんね」
美南「いえいえ、大丈夫です」
瑞枝「私たち、これから同じ映像専攻の子の部屋に行くんで、ゆっくり休んでてもらって大丈夫ですよ」
美南「ありがとうございます」

夏美「眞榮田たちの部屋って、どこだっけ？」
瑞枝「あれ、どこだったかな？　行けば分かるかも」

15　同・同・中庭
夏美と瑞枝が歩いている――雅也と拓海が合流する。
雅也「あれ、二人とも眞榮田のところに行く感じ？」
夏美「うん。うっちーたちも？」
拓海「そのままあいつらの部屋に行ってやろうと思って」
瑞枝「私たちって、本当考えること一緒だよね」

16　同・同・浩平たちの部屋
浩平、裕司、篤志が、それぞれ荷物の整理をしている――と、ノック音がする。
浩平「はーい」

と、ドアを開ける――雅也、拓海、夏美、瑞枝が立っている。

雅也「みんなで来ちゃった」

浩平「そう来ると思ったよ」

×　×　×

〈時間経過〉

夜。それぞれゲームをしたり、スマホで動画を見ている一同。夕飯の支度をしている雅也、瑞枝、浩平。

浩平「これから一週間、ほぼ同居生活って感じになりそうだな」

雅也「荷物は部屋に置いてきたけど、後はほとんどこの部屋にいようかな。せっかくみんなが顔を揃えるんだもの」

瑞枝「私たちは、ご飯終わったら、自分の部屋戻るわ。さすがにこの部屋で全員は寝られないでしょ」

浩平「それもそうだ」

雅也「（一同に）もうすぐご飯できるよ。みんなも手伝って」

一同「はーい」

と、それぞれ支度を始める。

N「初日の雰囲気で、この一週間のアメリカ研修はすごく楽しいものになると思っていました。自分の部屋があるのに結局、眞榮田たちの部屋に集まり、夜更かしをするレベルまでみんなで楽しい時間を過ごしていました。そんな楽しいアメリカ研修も、気が付けば折り返し地点の四日目を迎えていました。その日の朝、僕は同じく海外研修に来ていたナミに部屋に来るように呼びだされました」

17　同・同・夏美・瑞枝・美南の部屋

美南が待っている――ノック音が聞こえ、ドアを開けると、雅也が立っている。

雅也「おはよう」

美南「おはよう」

と、中へ通す。

雅也「どうしたの、話があるって」
美南「……」
雅也「どうした？」
美南「……」
雅也「ナミ……？」
美南「……」
雅也「……？」
美南「私さ……」
雅也「……？」
美南「好きになったみたい……うっちーのことが……」
雅也「え……」
美南「私たち、付き合わない……？」
返す言葉もなく唖然としたままの雅也。

つづく